



TITLE:

『増鏡』とその文学基盤(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

小島, 明子

CITATION:

小島, 明子. 『増鏡』とその文学基盤. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202125>

RIGHT:

氏 名	こ じま あき こ 小 島 明 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 71 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 国 語 学 国 文 学 専 攻
学位論文題目	『増鏡』とその文学基盤

論文調査委員 (主 査) 教 授 日 野 龍 夫 教 授 木 田 章 義 助教授 大 谷 雅 夫

論 文 内 容 の 要 旨

第一章「『増鏡』十九卷本原態説の検討」は諸本論である。『増鏡』は、「古本」と一般に呼ばれている、十七卷本形態のものと、「増補本（流布本）」と呼ばれる、十九卷本に二分できる。十七卷本形態のものは、応永本・永正本などで、一方、十九卷本形態の代表は後崇光院自筆本である。ところが、この通説に対して「増補本（流布本）」こそが古態であるという説がいくつか提示され始めた。

検討に用いる後崇光院自筆本には、十七卷本にはない二卷、「第五 煙のすゑずゑ」と「第七（無題）」がある。また十九卷本の「第五 内野の雪」は、十七卷本の「第五 内野の雪」と比べると、記事が大きく異なる。

まず、十九卷本原態説が裏付けにしていることには見落としがある。A という『増鏡』の記事が、『増鏡』の叙述範囲に入っている筈の、先行の事件 B を引用したとしても、B は必ずしも記述されてはいるとは限らないという点である。

次に、十七卷本記事はそれ同士でのみ、十九卷本特有記事もそれだけで、前後において対応が見られる。これを「呼応」と呼んでおく。

さらに、もっと細かい語のレベルを検討すると、行幸・御幸その他諸行事における供奉の貴族達の描写の仕方、女房の乗る「出車」についての記述の方法、「花を折る」という語の用い方の三点で、十七卷本の記事と、十九卷本特有記事の間に差異が存在する。

最後に、自然描写に注目すると、連歌の寄合語で結合していて、景物の累積をするという「連歌的自然美の描写」が、十七卷本では多数あり、しかも多少の語の入れ替わりはあるが、類似の表現が何度も使われている。

以上の四点の内部徴証により、十九卷本の特有記事は、十七卷本の『増鏡』とは同一とは考えにくいと言える。『増鏡』の「増補本（流布本）」は後人の増補であるという結論である。

第二章「『増鏡』における先例の意味——「明暗循環」説との関連——」は、『増鏡』に多く用いられ

る先例を取り上げ、それによって描写・説明される人物などに、いかなる価値を与えるかを問う。

まず、『増鏡』三部構成で「公武対立時代」の第一部と第三部を見ると、第一部は後鳥羽院、第三部は後醍醐天皇を中心人物とし、両者は、倒幕運動に着手し、隠岐に配流されるまでほぼ共通の足跡をたどる。二人は『源氏物語』の源氏の君のイメージを共に持ち、また後醍醐天皇は後鳥羽院の先例を踏まえるものとして人物造形されている。だが、この系譜上にある人物がもう一人いて、それが後嵯峨院の子の、亀山院である。これを、こねれない表現ながらも、わたくしに「公武対立派」と称しておく。

次に、『増鏡』の第二部を見ると、先例の投影によって、後嵯峨院—後深草院—伏見院が同一グループになる。これらの人物の先例に引かれるのは、いずれも卓越した人物で、しかもその子孫が『増鏡』の描く時代の皇室に続いている。これは「公武対立派」とは、明確に書き分けられている。このグループを、再びこねれない言い方ながら「公武協調派」と呼んでおく。

この「公武対立派」は、内部でさらに二分裂している史実を、『増鏡』は繰り返して示している。一方「公武協調派」は皇統の一本化を図り、その様子が対比されつつ『増鏡』の最終の巻「月草の花」では、後醍醐天皇が京に戻り、再び世を治めることを描いて終わっている。明暗の「明」の状況にある「公武対立派」と、「暗」の中にある「公武協調派」であるが、「公武対立派」には、その不義の子・冷泉院の皇統は絶える、源氏の君のイメージが付加されていた。つまり先例が負の価値を付与しているのである。これは、「公武協調派」が引用する先例と対照的である。

つまり『増鏡』は終末部に至って、「公武対立派」の光輝を描きながらも、その裏に「公武協調派」の再浮上も微かに示しつつ終わっている、という結論になる。それは『増鏡』が、従来言われているように「明暗循環」の様相を示すゆえに、享受者が十分推察可能な結果である。また先例が、それを暗示し、予言しているのである。

第三章『増鏡』と中世擬古物語——恋・情事の記事の受容——は、『増鏡』中の恋・情事のエピソードを、中世擬古物語を中心とした物語と比較検討することで、『増鏡』に反映されている時代相を問い直してみる試みである。

始めに『増鏡』に三箇所みられる、兄と妹の近親相姦の恋・情事については、『狭衣物語』および擬古物語を通じての『うつほ物語』や、完本は伝存しない擬古物語『下燃物語』が参照された可能性があることを示す。また『増鏡』は、現実の状態に即して話の筋道を進めようとしているが、その場合の表現に当たって、「……などはし給はず」「……ではなけれど」と伝統的な表現を否定している。しかし、これは、物語の類型的表現を踏まえているからこそ可能なのである。

続いて、『増鏡』の四件の皇女の私通に目を向けるが、父の愛を受け、社会的信望もあり、加えて美貌をも備えた皇女が、密通を行う、それは擬古物語が好んでモチーフとしている所である。この皇女の犯しは、帝の後妃の地位の下落が著しい平安時代末から鎌倉時代では、重大なタブー破りである。しかもそれが一品宮であると、それを手に入れた者は「王権を侵犯し、奪い取るという観念」があるほどである。四人の皇女のうち、綜子の事件は、亀山天皇の御代で起こり、あとの三人の場合は、後宇多天皇の御代でのことである。つまり、いわゆる大覚寺統（わたくしには「公武対立派」と二章で呼んでいた。）への侵犯なのである。

最後に、後宮の恋・情事に目を移すが、「後宮（元後宮を含む）と臣下の恋・情事」、「後宮を臣下に下賜」、「臣下の妻妾を後宮へ迎える」、「女性を盗みだし後宮に迎える」、「近親者の後宮を迎える」と五分できる。これらは、擬古物語の世界では極めて頻繁に登場するモチーフで、表現も相当に類似の点がある。従来、『増鏡』の恋・情事の記事が取り上げられると、その不道德性・退廃性が取り沙汰されるのであるが、これらは、先行の擬古物語の中では頻出している。それがおそらくは一要因となって、『増鏡』は描写の細部を省き、話の骨子のみを記述する傾向にある。そして、これらの当事者である帝・院というのは、亀山院、後宇多院、後醍醐天皇の三者に限定されている。この三名は、いわゆる大覚寺統のちょうど三代（祖父—父—子）に相当するという顕著な特徴がある。これを敢えて記した『増鏡』からは、大覚寺統血脈の濁り、という印象を受けざるを得ない。

『増鏡』が従来論の通り、『源氏物語』の強い影響下にあることは間違いないが、以上から同時に、平安末期の物語、および中世擬古物語の世界の反映を無視することは出来ないのである。

第四章「『増鏡』と『今鏡』——歴史への視点の継承——」は、これまでまとまった論のない『今鏡』と『増鏡』の両者の継承関係の検討である。

『増鏡』が先例を巧みに用いていたことは二章で述べたが、『大鏡』『栄花物語』では、先例を引用するのは、今描く時代が先の時代を超越した時代であった、という賛美の姿勢である。しかし、先例の用い方・そしてその数の多さなど、『増鏡』は『今鏡』に最も近い。

こうした先例を多く引用する『今鏡』の姿勢は、①ある事件の描写、②類似の先例となる事件の提示、③コメントが、おおよそその型である。これは貴族の漢文日記では、珍しくない。そして、天皇に関しては在位年数が長く、継嗣がいる、女性は入内して天皇の母后となる、これを吉例とすることは両者同様である。むろん、日記は、歴史物語を書く上での必強不可欠の素材であるが、日記に先例が多用されても、歴史物語作者が不要と見なせば記されることはない。従って先例を書き記す意識において、両者の距離は意外に近い。しかも、歴史物語も日記も、共に歴史を映す「鏡」であると、『今鏡』作者はとらえていたことも含めると、『今鏡』において、両者は大きな共通項で結ばれている。

この『今鏡』が先例を事ごとに持ち出すのは、現代は「末世」であり、従って常に、「昔の心地」がするか否か、「昔に恥じぬ」世であるか否かが関心の的となっているためである。しかし、『増鏡』では、通常「吉例」に他ならない先例を持ち出しながら、その暗い面をも記すことで、先例が付与される人物をそれを大きく上回る幸いの人物として描き出す。『今鏡』が有するような手放しの懐古とそれに対する劣等意識は、『増鏡』においては相当変質したものになっている。

そうした先例の摂取は、『大鏡』『栄花物語』→『今鏡』→『増鏡』という「入れ子」の形の引用であることが多い。ただ単に、ある事柄に類似した先例を累積する手法ならば、他の歴史物語でもあるが、「入れ子」となると『増鏡』は、一旦『今鏡』のフィルターを通した歴史事象を摂取するのである。『今鏡』は『増鏡』に、遠く隔たった平安時代全般に対する恰好なたたき台を提供した。それを継承した上で、『増鏡』の新しい側面も生み出されたのである。

第五章「『竹むきが記』の反復表現——『増鏡』の一時代相——」は、『竹むきが記』が従来、上下巻をそれぞれ前半・後半に分け、四部構成として別々の主題が論じられてきたことへの見直しである。

まず上巻の前半部に関しては、光厳天皇の典侍であった筆者の、単なる宮廷生活・公事としての記録、と考えられてきた。しかし、そうした記事と思われるものも、詳細に読むと、西園寺家がいかに親しく、誠意をもって持明院統に仕えたかにポイントをおいて描き出している。また同時に、西園寺関係者は、他の貴族と一線を画した敬称を加えて記され、中でも特に西園寺公宗の姿は、折々に書き留められる。これは、この上巻前半部が、これまで考えられていたよりも、格段に主題に密接にかかわっていることを示している。

続く上巻後半部となると、公宗は「大納言殿」として一回、また西園寺家の立場で「北山殿」として二回登場する以外は、名前を出さず臚化表現によって描かれ、公宗関係の描写は控え目である。だが、そこには「都の動乱の中、非常にまめやかな愛情を示した男と、ためらいながらも望まれて正室に迎えられる女」という造型が汲み取れ、女房としての責任感ある、意志的な名子の姿が描かれる他の部分とは印象が大きく異なる。この積極的な男とためらいがちな女というパターンは、文学に現れる恋愛の基本形の一つであるが、名子のこの姿勢の背景には、家格差のある婚儀をしたコンプレックスが窺われる。

それゆえ名子は、幸福感を表現するには、天皇・院・女院といった尊貴な人物に評価されたことを記すことが必要であった。それは上巻後半だけではなく、下巻においても、名子は実俊の成長の通過儀礼や行幸・御幸の折ごとに、西園寺家の庇護者にあたる人物の言葉を書き留めているのである。

加えて、『竹むきが記』の中での自然描写は「雪」の描写が多いのが特徴である。これは、和歌で「深雪」と「御幸」を懸けた表現が多いことが要因となっている。西園寺第への行幸・御幸は、我が子、実俊による西園寺家復興の象徴たるものであり、名子にとっては特に記録せずにはいられないものであったのだ。

これから、『竹むきが記』には、持明院統に、特に光厳天皇（院となってからも含めて）の治世と、その中で重用された名子自身と西園寺公宗・実俊の甲斐ある姿を残したいという意図が読み取れるように思われる。

第六章「『増鏡』と中世仮名日記」では、両者の影響関係を検証する。

まず、これまで『増鏡』が資料としたものの中で、中世女流日記としては『弁内侍日記』『中務内侍日記』『竹むきが記』『とはずがたり』が挙げられていた。この中で『とはずがたり』の影響が非常に大きいことは、古くから言及され、特に『増鏡』第二部は、それなしには成立し得ない。だが、残る三つの日記に関しては、『弁内侍日記』は『増鏡』作者が参照した可能性はあるが、それ以外の資料に拠っている。また『中務内侍日記』『竹むきが記』は明らかに無関係とわかる。

さて、その『とはずがたり』を比較の材料に用いて『増鏡』の『源氏物語』の受容の特徴を見ると、両者ともに「須磨」の巻を引くことが最多なのは同じであるが、その共通の引用記事は一つのみで、その嗜好に差異がある。ところが、二条良基の仮名日記『小島のくちずさみ』は、『増鏡』と近い『源氏物語』の摂取が垣間見られる。この『小島のくちずさみ』は構想そのものが、「須磨」「明石」両巻における光源氏の流寓と帰還を摸している。ただ光源氏像とダブっているのは、前半は良基であるが、後半になると、後光厳天皇にすり替っている。これは、第二章を思い起こさせる。『増鏡』においても、光源氏像に重ね合わされている人物の系譜があったが、特に、第一部では後鳥羽院を源氏の君にダブらせ、それを第三部

で醍醐天皇にすり替えている。つまり、『増鏡』と『小島のくちずさみ』は、構成という点で大きな共通性がある。

なお、この『小島のくちずさみ』の作者・二条良基は、『増鏡』の作者としての可能性が高いとされる人物である。ただ『増鏡』は、王朝憧憬の精神に基づいた皇室・公家中心主義が色濃く、一方、他の著作は、武家との親交を背景に摂関職を歴任した良基の立場から、足利將軍賛美に終始している、という相違点には疑問があるとされる。だが、国をよく治めることのできる者にこそ神仏の守りがある、また、武士としての分を越えない態度が好ましく、それでこそ世を長く保つことができる、といういささか虫のいい、公家としての望みが『増鏡』にも、良基の著作にも表われている。両者は、十分重なり合うと思われるのである。

以上から、『増鏡』は、二条良基の日記類と近い位置にあると考えられる。しかし、『増鏡』の作者を断定するには材料不足である。良基の諸々の作品の研究と、『増鏡』そのものの研究、この両者を進めてゆくことが必要で、その先に二本の線が交わる点が見出せるかも知れない。すべては今後の課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、室町初期成立の歴史物語『増鏡』に種々の観点から検討を加え、鎌倉初期から南北朝時代までを覆うこの作品の、歴史認識、表現の手法等々を考察したものである。全体は6章から成るが、新見を提示し得ていると認められる章について述べる。

第1章『『増鏡』19巻原態説の検討』は、作品論に先立つテキスト論である。『増鏡』の2系統のテキストのうち、17巻本を古本と見なすのが古来の通例であるが、10年ほど前から、流布本扱いされてきた19巻本の方が古態をとどめていると主張する説が相次いで唱えられ、明確な結論が得られないまま今日に至っている。論者は、叙述の前後の呼応・語彙・文体を綿密に検討して、19巻本の特有記事が、17巻本との共通部分とは異質であること、後人の増補と見なすべきであることを、十分な説得力を持って論証して、この問題にはほぼ決着をつけた。特に連歌の連想による自然描写が17巻本に頻出するのに対して、19巻本特有記事には見られないことを指摘したのは、いまだ確定していない『増鏡』の作者を考える上で示唆するところが大きい。

第2章『『増鏡』における先例の意味』は、『増鏡』において人物の行為を叙述する際に先行作品を引用することが多い（『増鏡』自体の先行部分を含めて）ところに着目し、引かれた先例が叙述の対象の人物にどのような意味を付与しているかを考察する。後鳥羽院と後醍醐天皇の叙述に『源氏物語』の光源氏の面影が認められることは従来から指摘されているが、論者は光源氏が投影されている天皇として更に亀山院が挙げられることを指摘する。そしてこれを手がかりに作品の叙述を検討し、亀山院には後鳥羽院が、後醍醐天皇には後鳥羽院と亀山院が重ねられ、後鳥羽院—亀山院—後醍醐天皇という系列が公武対立派という意味を担って描き出されていると論ずる。また『増鏡』の主要な資料の1つである『五代帝王物語』の取り入れられ方を綿密に検討して、後嵯峨院—後深草院—伏見院という系列が公武協調派として描き出されていることを論ずる。論者のいう公武対立派・公武協調派はいわゆる大覚寺統・持明院統に対応し、そういう2系列が鎌倉後期の皇室に存在したことは論者の指摘を待つまでもない。しかし『増鏡』が、そ

の2系列を、先例の挙げ方を通して明瞭に描き分けていること、後鳥羽院を大覚寺統の理念的始点に位置づけていることは、論者によって初めて明らかにされたところであり、『増鏡』の歴史認識を鮮やかに浮かび上がらせていると評してよい。

第3章「『増鏡』と中世擬古物語」は、『増鏡』に見出される恋・情事のエピソードについて論ずる。『増鏡』中の恋愛譚には、兄妹姦・皇女の私通・天皇による臣下の妻妾の強奪などのスキャンダラスな話がすこぶる多い。これについて従来は、鎌倉時代の宮廷の淀んだ空気、退廃性といったことが指摘されるだけで終わっていた。論者は、『石清水物語』『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』『下燃物語』等々の鎌倉時代の擬古物語において、こうしたスキャンダラスな設定が話を面白くする趣向として好んで用いられること、設定の細部までの一致や措辞の同一性から、『増鏡』はこれらの物語を直接に参照していることを論証した。もとより『増鏡』は歴史物語であって、何らかの事実に基づいて叙述するのであるから、虚構である擬古物語を面白さだけを理由にほしきままに取り入れるということとはあり得ない。しかし核となる事態にある程度の共通性があれば、擬古物語に従って話を膨らませることはあり得るであろう。文学性の低さゆえに顧みられることの少なかった擬古物語を丹念に調査して、『増鏡』の文学基盤の1つを明らかにした点は評価される。

以上のように本論文は幾つかの新見を提示して、『増鏡』の研究に大いに寄与するところがあるが、論証に瑕瑾がないわけではない。たとえば、第2章で、公武対立派の天皇に光源氏の面影が重ねられている理由を、直系の子孫が絶えるという運命の暗示であると論ずる。光源氏の血筋が不義の子、冷泉院で絶えることは『源氏物語』中の事実であるが、中世の『源氏物語』享受史において、光源氏について「血筋の絶えた縁起の悪い人」という認識の仕方があったという、恐らくは不可能な論証をしなければ、この主張は成り立たないであろう。また第3章において、擬古物語との結び付きとは別に、恋愛譚の叙述の意味を考察し、皇女への犯しが王権への侵犯の意味を持つことを前提に、描かれている4つの皇女私通事件が亀山院・後宇多院の治世下に起こっていることは、大覚寺統についての作者のある種の歴史認識を物語ると論ずる。しかし事件が起こったのは亀山院・後宇多院の時であるにしても、4人の皇女はいずれも後嵯峨院の娘であるから、大覚寺統への侵犯と見ることが妥当かどうかは大いに疑問がある。予定された結論へ結びつけた短絡的な議論といわなければならない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1997年1月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。